高岡短期大学紀要　第6巻　平成7年3月
Bull.Takaoka National College, Vol.6, March 1995

シンガポールの初等教育における華語教育[1)]
－南華小学校の場合－

山田眞一

（平成6年11月1日受理）

要　旨

多民族国家シンガポールでは国語のマレー語以外に，公用語として、英語、華語（標準中国語），タミール語が認められている。この多言語社会における言語環境に関しては，シンガポールに関する書籍のほとんどにおいて述べられており，学校教育においても二言語教育政策がとられていることは，よく知られている。すなわち，初等教育の段階から，英語を第一言語とし，民族語を第二言語とする二言語教育が行なわれてきた。しかし，１９９２年以降，教育制度の改革が行われ従来の二言語教育にも少なからぬ変化が見られる。本稿では，初等教育段階における言語教育（華語教育）の実態と問題点について，南華小学校を例に考察するものである。

キーワード

シンガポール，多言語社会，二言語教育，華語

1　はじめに

近年，驚異的な経済発展を遂げ，「四つの小竜」のひとつに数えられるシンガポールは，わずか641㎢の面積しかないが，多民族国家であり，多言語社会であることはよく知られている。シンガポールの民族構成を1990年の統計[2)]によってみると，シンガポールの総人口301万6千人のうち，77.7％が華人（中国系）[3)]，14.4％がマレー系，7.1％がインド系，その他が1.1％となっている。また，シンガポールの憲法はマレー語を国語と定め，公用語としては，マレー語の他に英語，華語（標準中国語），タミール語を認めている。これら四つの言語は建て前としては平等に扱われる。[4)]しかし，実際は，政治，経済活動の分野では英語が使われており，教育言語も英語が中心となっている。つまり，多言語社会シンガポールにおいてもっとも勢力を持つ言語は国語ではなく，公用語の一つである英語であり，シンガポーリアンのほとんどは，その言語能力，コミュニケーション能力の到達レベルに差はあるにしても，英語と民族語の混在した多様な言語生活を送っている。なぜシンガポールの言語政策において英語が重視されるにいたったかについて田村（1993)[5)]は，(1)英語が国際語であり，科学技術の言語であること。(2)植民地時代からの諸記録，行政，司法の連続性を保証できること。(3)華人，マレー系，インド系の各グループにとって，中立的言語であり，共通語として適していること。(4)外国人投資家の用いる言語であること，といった政府当局の説明に加えて，(5)英語がリー・クアンユーら党指導者の母語であった

産業情報学科

ことを挙げている。対外経済活動の道具としての英語,国内の各民族間のLink Languageとしての英語といったことの他に，シンガポール建国以来ずっと政権を担当してきている，人民行動党（People's Action Party）の指導者の母語が英語であったことも，たしかにシンガポールにおいて英語重視の政策がとられた理由であると考えられよう。

英語重視の政策は，初等教育機関における言語教育にとりわけ如実に現れている。建国以来一貫して，初等教育における第一言語は英語であり，英語の他に民族語を学ぶという言語教育政策が取られてきている。言語政策の変遷についてはすでに，田中（1987），田村（前掲書），太田（1994）[6] など先行研究において述べられているので，祖述することは避けるが，シンガポールにおける言語教育政策のねらいは，将来同国の政治，経済を担うエリートを養成することにあり，上級の学校へ進むには，英語と民族語の成績が重要視されるのである。こうした，英語重視という基本方針に変更はないものの，1992年に教育制度が改められ，第二言語の教育にいくつかの点で従来とは異る点が見られる。

そこで，次章以下では特に初等教育段階を中心に，1992年以降の教育制度について，それ以前との相違点に言及しながら見ていくことにする。

2 教育制度改革

S.Gopinathan（1994）[7] によると，シンガポールにおけるこれまでの教育制度改革，とりわけ言語教育制度の改革は，二つの報告書が基となっている。そのうちの，一つは1979年に出されたもので，もう一つは1991年に出されている。

シンガポール型教育で知られる初等教育段階からの振り分け選別制のもとになるものは，1978年８月にリー・クアンユーが当時の副首相ゴー・ケンスウイに命じて作成させ1979年２月に出版された，Report on the Ministry of Education 1978（いわゆるゴーレポート）である。この報告に基づき80年以降は，初等教育段階から選別制がとられることになる。それは，小学校１年から３年までは語学学習を中心にした共通教育課程を受け，３年生修了時に，英語，民族語，数学の三科目の試験（streaming examination）を受け，その結果と平常の成績を総合的に判断して，３コースに振り分けられるというものである。３コースとは，(1)Normal bilingual course（二言語正規コース），(2)Extended bilingual course（二言語延長コース），(3)Monolingual course（一言語コース）の三つである。

80年代はこの制度に基づいて教育が行われたのだが，振り分けの時期が早すぎる，一言語の生徒は早い時期にドロップアウトしてしまうなどのいくつかの問題点が出てきた。そこで，1991年3月に教育省は，初等中等教育改革案提言，すなわち Improving Primary School Education（IPSE）を発表し，以下のような改革提言を行っている。

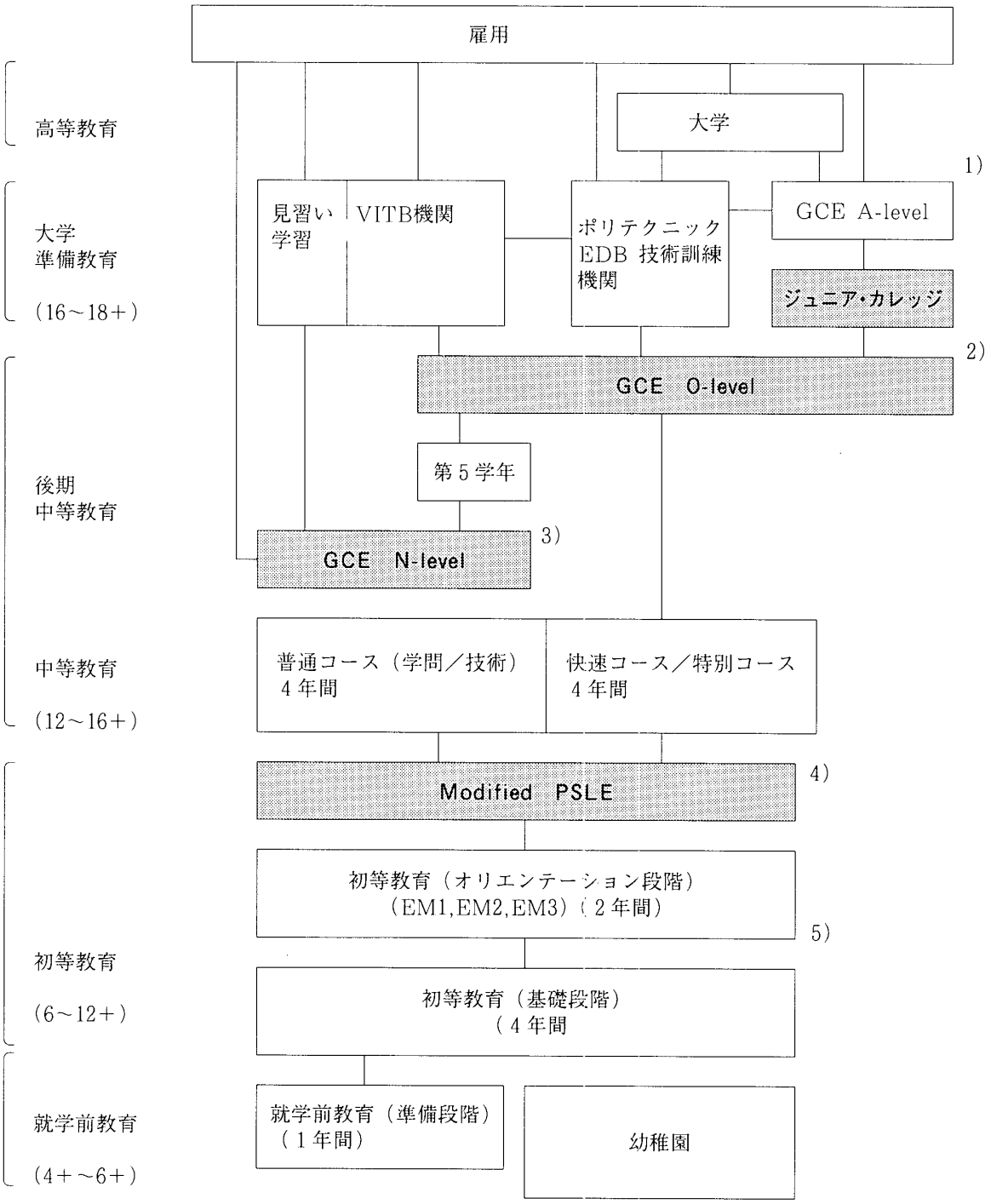
(1) 初等教育段階を次の三つの段階に分けて，英語，母語，算数に重点を置く。三つの段階とは，１年の小学校準備期間，小学校１年から４年までの基礎期間，小学校５年～６年のオリエンテーション期間である。

(2) 小学校１年～４年の教科時間配分のめやすは次のようにする。英語（33%），数学(20%），母語および道徳教育（27%），科学・芸術・体育などその他の教科（20%）。

(3) PSLE（Primary School Leaving Education）（初等学校卒業試験）を合否試験から，コース選別試験にする。

(4) 振り分け試験を小学校３年から４年にずらす。５年と６年には三つの言語コースを設ける。すなわちＥＭ１（英語と母語を第一言語水準－上級水準），EM２（母語は第二言語水準－普通水準），EMO（母語は話し言葉の水準）である。（図１参照）

教育制度図



1) General Certificate of Education Advanced level（中等教育資格試験　上級レベル）
2) General Certificate of Education Normal level　（中等教育資格試験　普通レベル）
3) General Certificate of Education Ordinary level（中等教育資格試験　一般レベル）
4) Primary School Leaving Examination（初等学校卒業試験）
5) English and Mother tongue ／EM1（母語を上級レベルで学習）
EM2（母語を普通レベルで学習）
EM3（母語を話し言葉のレベルで学習）

図1

なお，小学校４年修了時に行われる「振り分け試験」は各小学校が独自に行うものだが，学校側の一方的な判断で振り分けられるのではなく，家長は学校側の決定に異議を申し立てることができるようになっている。たとえば，試験の結果EM２に振り分けられた児童の親が，子供をEM１で学ばせたいと学校側に申し出れば，EM１で学ばせることができる。また，EMOという名称は、新しい初等教育制度が発足したときに，ＥＭ３と名称が変えらえれた。

このように，92年以前と以後とでは教育制度に若干の変化がみられる。振り分け試験の時期を遅らせるとともに，小学校５年，６年をオリエンテーション段階と位置づけるなど，初等教育にある程度の余裕を持たせたように配慮されているかのようである。しかし，初等教育段階からのエリート養成教育という点にはいさいさかの変化もなく，92年以降の制度では，EM１がエリート養成コースになり，このコースでは，英語と民族語のバイリンガル養成が目的とされているのである。

3　初等教育における華語学習指導要領と華語教材

この章では，華語教材と，その編集の基準となる学習指導要領について記すことにする。シンガポールにおける教育行政官庁である教育省には，教材開発や教科指導を行う部門として，カリキュラム開発局（Curriculum Development）とカリキュラム計画課（Curriculum Planning Division）がある。この二つの部局は密接な関連を持ちながらも，それぞれの役割がはっきりしている。

シンガポールは義務教育制度をとっておらず，教科書も有償であるが，教科書は国定教科書と検定教科書に分けられる。国定の教科書はカリキュラム開発局が執筆・編集する。たとえば，初級段階の華語であれば，カリキュラム開発局の小学華文教材組が執筆・編集し，教育出版社私営有限公司から出版されることになる。カリキュラム開発局は教科書のみならず，教師用のマニュアル，宿題帳，漢字練習帳，補助教材，視聴覚教材などの作成も行う。なお，筆者が参観を許されたカリキュラム開発局の教材展示室には，試用版であるが文字・音声・映像教材が一枚のレーザディスクに収められたものもあった。また，補助教材としての読み物は，後述する「中小学華文文字表」にある学年別の配分漢字を使って作成されているというから，その執筆にはたいへんな時間と労力がかけられるに違いない。

検定教科書は，カリキュラム計画課で検定する。カリキュラム計画課では，教科書の検定の他に，「小学華文科課程標準」（1993）といった教科指導要領や，「中小学華文字表」（1993）を作成し，教材を作る際のガイドラインを示している。

3.1　華語学習指導要領

シンガポールの初等段階での華語教育で，日本の学習指導要領に相当するのが，「小学華文科課程標準」である。いま，その全ての項目について論じるいとまはないが，全体の構成は次のようになっている。

第一章　前言　第二章　教育目標　第三章　教材選択の原則と範囲　第四章　総合教授法　第五章　教学活動に関する意見　第六章　言語技術　第七章　評価法

さらに付録として(1)小学華文科の期待される教育効果 (2)華族文化と伝統的価値観の綱目 (3)課外閲読の手引き (4)自学学習能力の育成 (5)字表の説明 (6)成語表 (7)特選小学高級華文課程（小一～小四）の手引きがあり，最後に「基礎華文科課程教学の手引き」がついている。

これらの内から重要と思われるものについてだけ，言及することにする。

(5)字表の説明では、基礎段階の１年から４年の間に1300字を覚え、オリエンテーション

の段階の５年，６年次にはEM１ではさらに700字を加えて計2000字，EM２では500字を加えて計1800字を覚えるように目標が定めれている。

(7)特選小学高級華文課程によると、高級華文の週当たりの時間配分は次のようになっている。(図２参照)

特選小学高級華文(小一～小四)の週あたりの授業時間数

学年 / 時間数	小一	小二	小三	小四
基本段階の時間数	12	10	9	8
追加時間数	2	2	4	4
総時間数	14	12	13	12

図２

教科書を作る際の語彙の制約についての項目がないのが気にかかるが，カリキュラム計画課の担当者との懇談の中でも，シンガポールでは華語を外国語として学習するのではないので，「語彙表」作成の必要はないとのことであった。しかし，シンガポールの華語教科書の語彙について調べる手段がないことはない。政府の機関ではないが，聯合早報の用字用語調査工作委員会編による「聯合早報　中小学華文課本　用詞調査報告（上）（下）」(1989年５月）という大部の資料があり，これにより華語教科書に表れる語彙について頻度別に知ることができる。

3.2　華語教科書

国定教科書は教育部のカリキュラム開発局の華文教材班によって執筆・編集されることは先に述べた。その中身についてここで詳しく分析することはしないが，参考までに「小学華文教材　学生読本（第三版）　一年（上冊）　１A」の第一課を示しておく。(図３参照)

目　录

单元一
1.1　这是人 …… 1
1.2　我要尺 …… 4
1.3　他有木马 …… 7
1.4　弟弟会读书 …… 10
单元二
2.1　他先洗手 …… 13
2.2　妈妈来了 …… 16
2.3　巴士又来了 …… 19
2.4　妹妹起身了 …… 22
单元三
3.1　你们是学生 …… 25
3.2　今天是星期一 …… 28
3.3　这个皮包是爸爸的 …… 31
3.4　弟弟喜欢拍球 …… 34
单元四
4.1　妈妈要去工厂 …… 37
4.2　妹妹把着一个皮球 …… 40
4.3　哥哥买了七个气球 …… 43
4.4　哥哥看见七只鸟 …… 46
单元五
5.1　我有笔，他也有笔 …… 49
5.2　小鸟会飞，也会跳 …… 52
5.3　我喜欢吃水果和青菜 …… 55
5.4　小红的爸爸和妈妈都是校长 …… 58
单元六
6.1　公公去看戏 …… 61
6.2　我们到教室去上课 …… 64
6.3　姐姐在吃饭 …… 67
6.4　小鸟在树上唱歌 …… 70
生字表 …… 73



図３

これを見てまず気がつくのは，中国語式ローマ字であるピンイン・ローマ字がないことである。日本の中国語教育では通常まず，ピンイン・ローマ字を覚えることから入る。シンガポールでは1973年に，華語を表記するのに，中国大陸で使われている簡体字と，その発音表記として漢語拼音字母（ピンイン・ローマ字）が採用されたが，図3に見るようにピンイン・ローマ字は華語学習の初期の段階では出てこない。「小学華文科課程標準」によると，ピンイン・ローマ字の学習が始まるのは小学校3年からとなっている。これは，英語のアルファベットとの混乱を避けるためであることが第一の理由と考えられるが，それよりも，華語を外国語として学ぶ場合と，第二言語として学ぶ場合とでは，ピンイン・ローマ字の活用方法が異なることに原因があるのであろう。そもそも，ピンイン・ローマ字が音そのものを表しているのではないことを考えると，ピンイン・ローマ字をあくまでも補助手段とする使い方は理にかなっているとも言える。そのままでは，にわかに日本の中国語教育に適用はできないにしても，必ずまずピンイン・ローマ字から入るというこれまでの教授方法にも，再検討する余地はあるように思う。

4 南華小学校の華語教育

4.1 SAP Schoolとしての南華

「諸外国の学校教育（アジア編）」（文部省大臣官房調査統計企画課 平成3年12月）によると，シンガポールには203の小学校があり，そのうち国立が158校，公費補助の小学校が45校ある。本章で取り上げる南華小学校は公費補助校で，その前身は1917年に華僑の団体によって創設された南華女子小学校で，シンガポールでも有数の歴史を持った小学校である。南華に通う児童の多くが華人であり，1989年には政府のSAP（Special Assictance Plan）プロジェクトの小学校10校，「特選小学校」に選ばれている。SAPプロジェクトの主なねらいは，二つあり，一つは英語と華語の両言語を上級レベルで学ばせるようにすることで，もう一つは華人の持つ伝統的価値観を教授することである。通常の小学校であれば，5，6年次のEM1のクラスにおいて，上級華語のコースが設定されるのであるが，特選小学校である南華小学校では，1年からHigher Chinese Language（高級華語）を教えている。といっても「高級華語」用の教材が特に用意されているのではなく，補助教材などを使っての学習などが主で，華語の学習時間が通常校よりも増えることになる。全教科に占める華語授業の割合知るために，南華小学校の各教科の時間割配分を示すと次頁図4の通りである。週あたりの授業時間数は1年次に14時間，2年次に13時間，3年次は9時間，4年次は8時間となっている。一方カリキュラム計画署の「小学華文科課程基準」によると（図2参照），1年次14時間，2年次12時間，3年次13時間，4年次12時間となっていて南華の基礎段階での高級華語の時間数は「基準」より若干少なくなっている。特に3年，4年次での時間数が「基準」に示されている時間数よりかなり少なくなっている。しかし，道徳の授業は華語で行われ（これは南華に限らず道徳の授業は民族語で行うことになっている），南華では音楽の時間にも華語と関連づけて授業が行われている。例えば，唐詩を朗読したあとで，ピアノの伴奏に合わせて手振りを加えながら唐詩を歌うというような方法を音楽の授業に取り入れ，華語の授業時間数の不足を補っている。

4.2 P2華語授業

南華小学校で見学したのは2年生の華語の授業で，教科書は国定教科書の「小学華文教材P2」を使用していた。授業の内容の概略は以下のようになる。

教室に入ったときにはすでに授業が始まっ

教科別時間配分（南華小学校）

学年／教科	1年	2年	3年	4年	5／6 EM1	5／6 EM2	5／6 EM3
英語	17	16	16	13	13	13	16
母語	14	13	09	08	12	09	04
及び							
道徳教育	03	03	03	03	03	03	03
数学	07	09	11	11	10	10	14
科学			03	04	05	05	03
美術，工作	02	02	02	02	02	02	02
社会				02	03	03	03
体育	03	03	03	03	02	02	02
音楽	02	02	02	02	01	01	01
保健				01	01	01	01
集会	01	01	01	01	01	01	01
週当たり総時間数	49	49	50	50	53	50	50

図4

ており，黒板には学習する単元名「能做的事自己做」と書かれてある。児童は25人で，4つの班に分かれて机が並べられている。教壇はなく，教師は椅子に腰掛け児童はその前に座っていた。教師の左手にはホワイトボードがあり，そこには教材と同じイラスト（4コマ）が張られている。ホワイトボードにはその他に課文に出てくる単語のうち，学習すべき単語を三つ大きめのカードに書いて張ってある。教師の後について児童に単語の発音をさせた後に，それぞれの単語の意味を児童に答えさせる。その後で教師がその単語の意味を伝える。次に別の児童にその単語を使った単文を作らせる。再度三つの単語を音読する。教科書の本文を2，3人の児童に読ませてから、一斉に音読させる。このとき教師は音読しない。次に本文の内容に関する質問をし，3，4人の児童に答えさせる。ここまでが当該課に関しての授業で、次に前の単元で学習した語句の復習を行う。まず，OHPに一組10個くらいからなる単語を順不同に三組写し出し，各班に一枚ずつ大きな藁半紙を配る。児童は同じ班の者が互いに相談し合いながら各組の単語を並べ換えて，意味の通る文を藁

半紙にマジックで書く。キィーとなる単語はすべて一つ前の単元に出てきたもの。児童が藁半紙に答を書いている間に，教師は児童の間をまわり，ヒントを与えたりする。10分ほどして各班で書いたものを発表させ，誤りがあれば訂正する。

以上が参観した華語クラスでの授業の流れである。なお，教科書にはピンイン・ローマ字は書かれておらず（但し教師用指導書には全文にピンイン・ローマ字がふってある），教師は華語を使って授業を進めていた（授業終了間際にOKといったのが唯一の英語）。

授業中教師が話す割合は3割程度で，なるべく児童に話させるように誘導していた。語学の授業らしく教室内は絶えず児童の声が聞こえ活気にあふれていた。児童の華語を話したいという気持ちがうまく引き出された授業であったと思う。授業中もっとも感心したのは，ホワイトボードに張ってあった単語カードが，風に吹かれて落ちたときに，一番前に座っていた児童が，すぐに立ってカードを拾い張りなおしたことである。これは，しつけの問題というより，その授業に積極的に参加していることの現れだと感じた。

「教室からざわめきが消えた」というのが「売り」の教科書がよく売れるという，日本の中国語教育の実状を改めて考えさせられた授業であった。

5 まとめ

極論すれば，シンガポールの華人にとって，英語と華語のバイリンガルであることが，エリートとなるための要件になる。そして，人材育成という社会的使命を果たすことを求められる教育は，制度として，当然ながらバイリンガルのエリート養成を目指したものになる。この小文で取り上げた南華小学校は，昨年の卒業生235名のうちＥＭ３の児童一人を除き中学校に合格し，そのうち87.23％の児童が特別コースか快速コースに進んでいる。全国の平均が49.2％であることを考えれば，いわゆるエリート校である。そこでの華語教育は，シンガポールの平均的な小学校の華語教育とはいえないかも知れないが，シンガポールが目指す人間像を考える上では，一つの典型といえるであろう。言うまでもなくことばは学校でだけ教育されるものでなく，家庭内でどういう言語を使っているかが，児童の言語能力に大きくかかわってくる。南華小学校校長は，父兄会の度ごとに，家庭で積極的に華語を話すようにと訴えているという。授業参観の後に何人かの児童に質問してみたが，半数は，家庭では両親と英語で話しているとの答が返ってきた。シンガポール滞在中に出会った人々の中には，華語での読み書きができない子供が増えている事への危機感を感じている華人は少なくなかった。英語第一主義から，英語と民族語の二言語主義にシフトを変えたシンガポールが今直面している問題は，カルチャーの問題のように思える。バイリンガルでバイカルチャーであれば，完全なバイリンガルといえようが，バイリンガルでモノカルチャーである場合は完全なバイリンガルとはいえない。シンガポールのバイリンガル教育の目指しているものが，バイカルチャーなバイリンガルという視点があるのか，この国の今後の言語政策の展開に注目したい。

文　献

1）小論は，高岡短期大学委任経理金による海外調査研究成果の一部である。
シンガポールでの調査に際しては，シンガポール教育省カリキュラム発展署の副署長洪孟珠博士，南華小学校馮月桂校長にいろいろ便宜をはかっていただいた。
広島修道大学の郭春貴教授には，洪博士への紹介の労を取って下さったばかりでなく，シンガポール滞在中，大変お世話になった。併せてここに心より謝意を申し述べたい。

2）SINGAPORE CENSUS OF POPULATION 1990 LITERACY,LANGUAGES SPOKEN AND EDUCATION:LAU KAK EN SUPERINTENDENT OF CENSUS DEPARTMENT OF STATISTICS SINGAPORE, 1993

3）太田（1994）によると，シンガポール華人の85%が現地生まれだという。土着化した彼らは自らを華人と呼ぶ。

4）例えば，シンガポールの地下鉄（Transit Link）のカード式切符の裏面には，使用上の注意書きが，左上に英語，左下に華語，右上にマレー語，右下にタミール語で書かれている。

5）「頭脳国家シンガポール」田村慶子　講談社　1993年

6）「国語を使わない国　シンガポールの言語環境」太田勇　古今書院　1994年
「シンガポールの言語統合」田中恭子「近代革命とアジア」所収　名古屋大学出版会　1987年
「シンガポールの言語政策」田中恭子「国際政治」第84号　1987年

7）Language,Society and Education in Singapore:Issues and Trends S.Gopinathan,Anne Pakir, Ho Wah Kam & Vanithamani Saravanan TIMES ACADEMIC PRESS,1994

On Chinese Teaching at the Primary School level in Singapore

-the case of Nanhua Primary School-

Shinichi YAMADA

(Received November 1 ,1994)

ABSTRACT

Singapore is well known as a multilingual country . Malay is its national language, and ministry permittes three languages as official languages : English , Mandarin and Tamil. Although we already have a lot of pubuication that show the language environment in Singapore, little attention was paid to the language teaching aspects of primary or secondary schools in Singapore.

In this paper we introduce Chinese language teaching in the case of Nanhua primary school,and discuss problems on Chinese language teaching. We believe that Chinese language teaching at Nanhua primary school gives us many useful ideas that may help improve language teaching at the college level in Japan.

KEY WORDS

Singapore, Multilingual society, Bilingual education ,Huayu